

海がピンチだ！

戦後の高度成長期、工業開発や陸地の開発が急速に進んだ頃から、伊勢の海の環境が非常に悪くなりました。博物館開館の頃には、漁獲量が減り、奇形の魚が多く持ち込まれるなど、海は危機的状況でした。

単純には言えませんが、昔は河川から流れてくる水は自然のままでした。河川流域の人々が増え、人工的な物質が大量に流れ込むようになり、さらに、河川がコンクリートでおおわれたことにより、陸の栄養が海に入らなくなってしまったのです。植物プランクトンや海草・海藻は陸から流れてくる栄養を吸収して育ちます。海の魚介類は、その植物プランクトンを食べて育つので、陸からの栄養を吸収しても大事なのです。

赤潮の発生や伊勢湾の真ん中に貧酸素水塊があるなど、伊勢湾が死にかけているようです。伊勢湾を回復させるには、生態系の回復が必要であり、そのためには、まず藻場を回復させなければならぬと館長は考えていました。かつて伊勢湾は豊かな漁場でした。

1950年代まで、伊勢湾には藻場がたくさんありました。岸辺から2～3km辺りには、藻場のベルト地帯があつたのです。

藻場は、多種多様な生きもののすみかになっています。生きものが生まれて育つ場所であり「海のゆりかご」とも言われます。また、水の浄化や底質を安定させる役割も担っています。それが今では、皆無に等しい状態になっているのです。

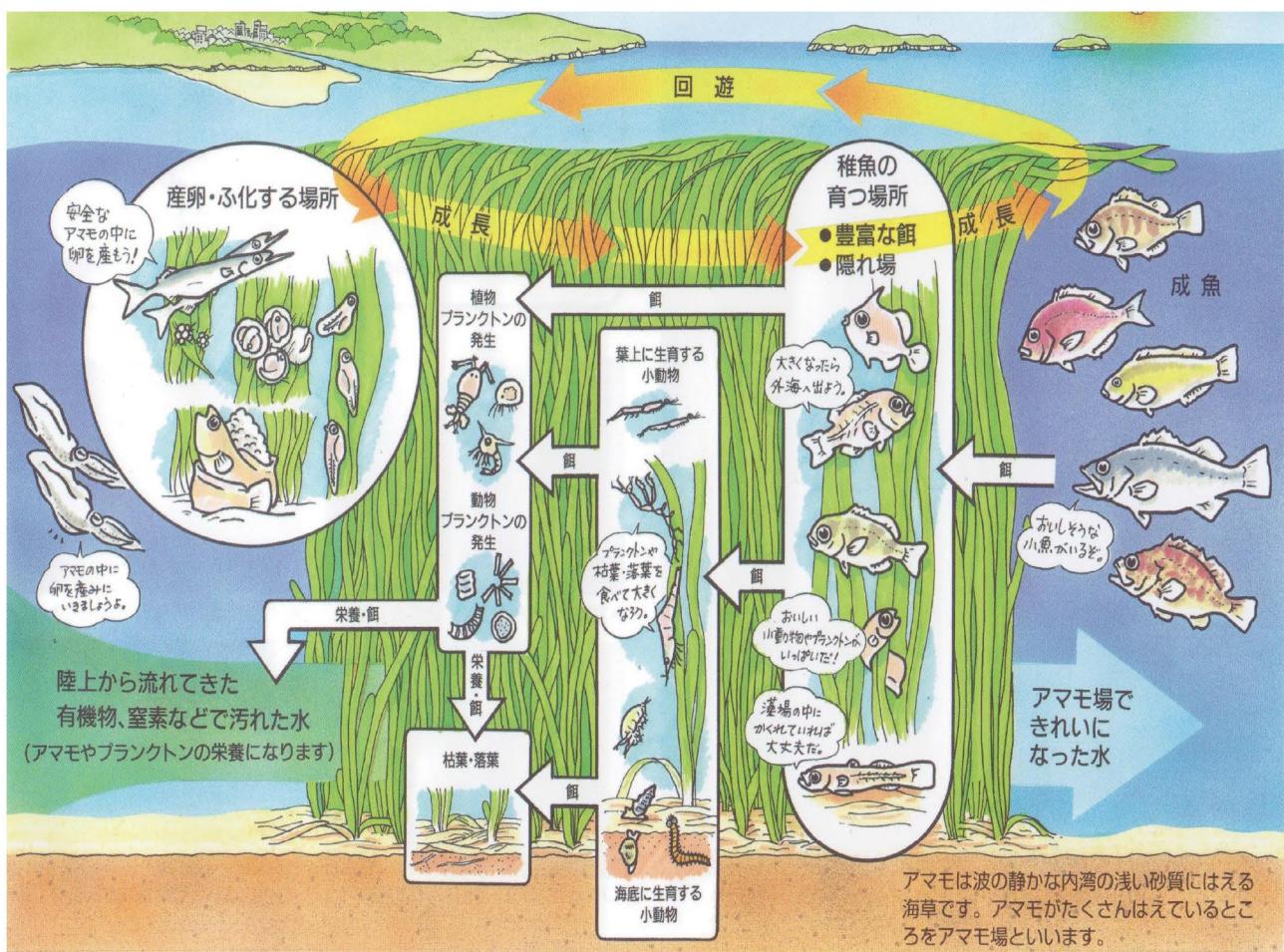
「昔は、伊勢湾の海岸線には、どこにでも砂浜と松林があり、白砂青松といわれる景色が見られましたが、今では鈴鹿の鼓ヶ浦あたりを残して、海岸の青松はなくなってしまいました。特に、魚つき林^{うわ}は、魚貝類の生態に大きく影響するため、漁民ならば絶対切らない。」と館長が話してくれました。

山に木がなくなれば、ほとんどの人は気がつきますが、海中の変化にはなかなか気づいてもらえません。藻場がほとんどなくなるなど、私たちの生活に影響しないはずがないにもかかわらず、多くの人の関心が海に向いていないから気がつかないのです。

海の博物館では、簡単な方法でアマモをふやす体験学習などを通して、子どもたちと一緒に海に触ることから、海への関心を高めています。

※魚介類の生息や生育に影響をもたらす海岸沿いの森林。

藻場の役割「海のゆりかご」



資料提供：海の博物館